

維新後、落語家の地位が向上する。

明治を代表する三遊派の初代三遊亭
圓朝えんちょうと柳派の初代談洲楼燕枝だんしゅうろうえんし（初代
柳亭燕枝りゅうてい）のお陰だ。因みに私の
芸名は談洲楼にあやかっている。

彼らが政治家、財界人、文化人と
つきあい、それが地位向上につなが
るのだが、圓朝は渋沢栄一の懇意を
得て、度々別荘に招かれた他、随行
して静岡の徳川慶喜を訪ねている。

現在では圓朝が高名なため、芸の
上でも燕枝とは距離があり、もしや
敵対していたのではと心配だった
が、その交遊のエピソードに頬が緩
んだ。また、歌舞伎に関しては、談
洲楼が九代目市川團十郎から贈ら
れた名であることにも一目置いてい
た。

圓朝の作った噺に『眞景累ヶ淵』
がある。文明開化の明治、幽霊は否
定され、圓朝は幽霊を信じるのは神
経病と高座で言いつつ、その神経に
眞景の字を当て、幽霊にリアリティ
を持たせたのだ。その経緯は承知し
ていたが近年あやふやとなり、今回
本書で確かめ、ホツとしている。

女性落語家の存在にビックリした。
燕枝の弟子・若柳燕嬢わかやなぎえんじょう（本名麻生た

小咄に毛の生えたものが
落語となるまで



本の泉社 / 2000円

明治維新と噺家たち
—江戸から東京への変転の中で

柏木 新

ま）だ。女性落語家第一号で、自由
民権運動に身を投じ、活動家として
演説をしていた女子がいかにして落
語家になったか、どんなネタを演じ
たか等、弟子にした燕枝の心理とも
ども面白い。燕嬢を乗せた人力車が
警察官に呼び止められ、さあそこで
燕嬢が警察官に切った啖呵の小気味
いいのなんの。

フランス人が書いた噺家・寄席の
案内書も興味が尽きない。領事館の
一等書記官ジュール・アダンのも
で、挿絵とともに明治中頃の落語界
の様子が分かり、当時の寄席の数が
二四三カ所であるとフランス人が教
えてくれるのだ。

入門時の、楽屋の古老の言を思い
出す。「小咄に毛の生えたようなもの
が、明治中頃に今の形になるんだ。
マクラを振って噺に入り、展開があ
ってストーンと落ちがくる形にだ」

評者 立川談四楼 落語家